第15回例会報告

ー 第1部講演 ー

『人生に定年なし ー過去ご破算にして修行に飛び込むー』

第15回例会第1部では、『人生に定年なし ー過去ご破算にして修行に飛び込むー』をテーマに、臨済宗妙心寺派開眼寺住職 柴田文啓氏にお話いただきました。

講演内容

人間にとって一番大事なものは何だと思いますか？ 戦後、人々はとにかくがむしゃらに働き、その結果、あっという間に日本は世界に名だたる経済大国になりました。それはすばらしいことでしたが、日本の美しい心、豊かな「心」を育む社会構造･システム作りを忘れてしまっていたように思います。

ここで「心」と関わりの深い宗教について少しお話します。宗教とは、人間として価値のある生き方をする教え･指針であり、哲学そのものです。もっと人間らしく、もっと高尚に生きたいと思う心が宗教心と言えるのです。人には、食事で身体に栄養を摂るように、心を育てるものも必要です。そして心に入れる栄養が、宗教だと私は考えます。

現在、私が住んでいる長野県は、男女ともに日本一長寿の県であると同時に、世界一長寿の県でもあります。にもかかわらず、高齢医療費が日本で最も安い県です。その原因としては、県をあげての減塩運動の効果が一つと考えられていますが、さらに大きな要因は、65歳以上の有業率(*)の高さです。65歳以上で仕事をもつ人の数も日本一の県です。世のため人のために何か仕事することが、健康を維持し、長生きする一番の方法なのです。

最近、第一の人生以上に第二の人生を、より充実させることが重要だと思います。どんな人生だったとしても、最後の幕引きのとき、もし直近の仕事が充実していたならば、きっと「いい人生だった」と感じるのではないでしょうか。第二の人生では、自分でももうある程度自分の能力もわかっていますし、社会のこともわかっているので、仕事も的確に選択できるでしょう。私は78歳ですが、100歳まで生きるつもりです。あと22年ある、そう考えると何でもできると思います。

現代の日本の雇用形態は、定年がくると辞めなければいけないという過酷な状況です。アメリカでは能力重視で、ポジションと契約の合意があれば、年齢制限はありません。日本もアメリカのように、将来は定年を無くすべきです。体力や能力、意欲があれば、どんどん仕事を続けていってほしいと思います。

この地球上に存在する生物の中で、生殖期の後、こんなにも長く生きるのは人間だけです。それは何かしらの任務があるからで、ズバリ答えを言うと、それは「孫の教育」です。それほど、人間は教育に時間がかかる動物なのです。

学校や病院がなかった時代、子どもの教育や治療は、経験のある祖父母がその役割を担っていました。また、多くの人たちと部落を作り生活する中で、交流するための心や気配りなども、子どもたちは祖父母から教わっていたのです。

現代社会では、お孫さんに厳しく教育するおじいさんやおばあさんはほとんどいません。しかし、そもそも人間が長生きなのは、次世代を担う人間を育てる役割があるからなのです。我々は、時には心を鬼にして、孫世代の心の教育をしなければなりません。次世代を担う人間の心を育て、そして、できるだけ美しい地球を次の世代に渡していくことが、仕事以上に重要な、我々に課されたミッションだと思うのです。

(*)…生産年齢人口に占める有業者の割合

講師プロフィール LecturerProfile

柴田 文啓 氏 ［臨済宗妙心寺派開眼寺 住職、元GE横河メディカルシステム 常務取締役］

福井大工学部卒業後、横河電機株式会社に入社。GE横河メディカルシステム常務取締役、横河電機取締役、横河アメリカ社社長を歴任。65歳で得度し、67歳のとき長野県千曲市の臨済宗妙心寺派開眼寺住職に就任。過去の経歴、伝統にとらわれず全てをご破算し修業し、世のため人のためになる僧侶として第二の人生を実践。

第15回例会報告

ー 第2部講演 ー

『潮目は変わった! デフレ脱却、日本経済再生』

第15回例会第2部では、『潮目は変わった! デフレ脱却、日本経済再生』をテーマに、国立大学法人 電気通信大学特任教授 千野俊猛(としたけ)氏にお話いただきました。

講演内容

この半年で、経済情勢は大きく変わりました。日本経済はリーマンショック後2年、東日本大震災でさらに2年、合計4年の間苦労しました。アメリカは、2001年の同時多発テロから2008年のリーマンショックまで、長く経済が低迷しましたが、今では経済が再生しています。現在、ドル高、株高、金の価格も高く、この3つが同時に高いという状況は今までなかったことです。この新しい時代をどう読み解くかです。

今の日本経済再生の処方箋は、大胆な「財政出動」「デフレ脱却」「日銀の金融緩和」などですが、効果的とは言えない施策もあります。私は、国がとるべき景気対策は「公共事業の復活」と「科学技術投資」だと考えます。まず、全国の小学校を作り直すことを提唱します。先の東日本大震災を教訓に、地震に耐えられる学校を作り、有事の避難場所として使える仕組みを作るべきです。また「科学技術投資」で、国や大学の研究費をつけ、その成果を民間に回し、キラリと光る中小企業を作るのです。

日本のモノづくりについて考えてみましょう。モノをきちんと決められた場所に「回転させる」「動かす」「止める」という一見当たり前の作業は、実は大変なことで、とても重要です。また、モノを動かすときはエネルギーが必要で、

機械と電気を融合させる必要があります。この機械技術をもっているのが、日本のモノづくりの強みです。

今後、日本のモノづくりはどうすればいいでしょうか。まず工程を変えるべきです。ベースとなる技術と製品は、日本国内に残さなければ付加価値は生まれません。例えば、トヨタは全てを一から作れる技術を日本国内に残しています。ただし、経費は高くなりアジア市場では負けてしまいます。生き残るためには、材料やプロセスを改革し、工程を少しでも減らす必要があります。

さらに、作るモノ自体も変えるべきです。今の日本の産業状態は「自動車の一本足打法」ですが、いつまでもそれではいけません。例えば、将来、高性能の固体電池ができれば、自動車からエンジンはなくなるでしょう。技術を結集して燃料電池や高性能の固体電池を開発し、ロボット・航空機・医療機器など、自動車に次ぐプラットフォームを作ることです。

企業経営者の方々に参考にしていただきたいのは、100年続いている企業です。そういった企業に共通するのは、創業の精神と企業理念を繰り返し掲げ、忠実に守っていることです。もう一つは、本業以外の新事業を起こしていることです。日々変化する世の中に則して、柔軟に企業も変わっています。高い企業理念など変えてはいけない部分と、新しいソース(技術)をもとに新事業を立ち上げる部分、この2つがないと100年は続かないと思います。

リーダーの在り方も重要です。オーナー経営は、例えるなら「フルマラソン」で、全力で走り切る覚悟で臨むものです。対して、サラリーマン経営は、1人の経営者が長くなると会社は長続きせず、「駅伝」のようにたすきを渡していく必要があります。それぞれの特徴を理解した上で、100年続く企業を目指してほしいと思います。

講師プロフィール LecturerProfile

千野 俊猛(としたけ) 氏 [国立大学法人 電気通信大学特任教授、日刊工業新聞社顧問・前代表取締役]

日野市出身。早稲田大学卒業後、日刊工業新聞社に入社。取締役編集局長を経て、代表取締役社長に就任。モノづくり企業について特に造詣が深い。ジャーナリストの経験、また企業経営者としての事業運営の経験にも富む。現在は、国立大学法人電気通信大学特任教授として活躍。